

校長室だより第 19 号（令和 8 年 8 月 14 日）

少年ジャンプ発行部数 100 万部を切る。

1994 年に発行部数 650 万冊を記録した『少年ジャンプ』がついに 100 万部を切ることとなった。（令和 8 年 8 月 6 日のニュース）当時、大人も子供も『少年ジャンプ』を読んでいて、発行日である月曜日の電車の中は『少年ジャンプ』を読む人がたくさんいたのを覚えている。

当時、私はすでに千葉市の小学校に勤務しており、『少年ジャンプ』の話（ドラゴンボールとかスラムダンクとか）をすれば、大概の子どもたちと話が合い、心を通じ合わせる（？）ことができた気がする。『少年ジャンプ』だけでなく、テレビ放送で観る番組も似ていて、共通の話題には事欠かなかった。

2026 年の現代、YouTube、たくさんチャンネル、たくさんの番組があり、子どもたちとの共通の話題があるのだろうか。選択肢が増えたことは好ましいことだけど。

さて、少年漫画週刊誌に話を戻す。『少年ジャンプ』が 100 万部を割ったことで話題となったが、他にも有名な少年週刊誌がある。『少年サンデー』と『少年マガジン』である。ちなみに発行部数は『少年サンデー』が 12 万部。『少年マガジン』は 28 万部だそう。どの雑誌も厳しそう。

今、どんな漫画が連載されているのかもほとんど知らないのが私の現実だ。

少年ジャンプで『ワンピース』

少年サンデーで『コナン』

少年マガジンで『ブルーロック』

知っているのはこれだけ。

2026 年の現代において、各社ともにデジタル配信を行っており、その数を足せばそこそこの発行部数になるのかもしれない。また、当然ではあるが各会社はその対策に力を入れていることであろう。

だから、紙の媒体が売れなくなって一番困るのは書店であろう。毎週月曜日に足を運んでいた人が来なくなるだけでも大打撃。また、雑誌以外の本もネットで注文されてしまう。

そりゃあ、本屋がなくなるわけだよ。（言葉が悪くて、申し訳ない）

本屋のよさは、目的の本を買うことだけではない。本屋に行き、たくさんの本を目にして、手に取ることによってその人の世界が広がると考える。

昭和の古い考えかもしれないが、月に1万円分の本（仕事の本や小説など）を街の本屋で買い続けていきたい。自分のためにも、本屋のためにも。